

クマノザクラの保全と活用に向けた取り組みについて

林業試験場 経営環境部 的場 彬通

[はじめに]

クマノザクラは実生からの育成が比較的容易であるが、他のサクラ類と交雑することが確認されている。在来のクマノザクラを保全し増殖するため、効率的なクローン増殖技術の開発が必要となる。また、クマノザクラの名所づくりには様々なニーズに対応するため多様な特性が求められることから、各地域で開花時期や花色などが異なる多様な特徴をもったクマノザクラを選抜する必要がある。同時に、老化衰弱した‘染井吉野’の後継としての改植を見越し、同一植栽地にサクラを植えることで発生する連作障害の確認やその対策法の検討が必要となる。

[材料と方法]

クマノザクラのクローン増殖による増殖法を検討するため、挿木および接木について検討した。優良系統を選抜するため、樹形が優れている、花が密につく、花色が濃い等の理由で優良候補木を選び、簡易評価を行った。また開花期に県内11市町村にてクマノザクラ及びその他自生しているサクラ属の花弁を採取しデータを測定した。サクラ類の連作障害を確認、検討するため、県内3か所のサクラ植栽地にて‘染井吉野’下の土壌を採取し、土壌アッセイ法にて連作障害の有無を確認した。

[結果・考察]

(1)クマノザクラ挿木試験

成木から採取した穂木よりも、幼木（同じ個体のクローン）から採取した穂木のほうが発根率が高かった。

(2)クマノザクラ接木試験

接木に使用する台木として、ヤマザクラ台木とクマノザクラ台木の活着率には統計的な差がなかった。また、オオシマザクラ台木のみ活着率が良い個体があった（図1）。

(3) 優良系統選抜

クマノザクラの花弁サイズはばらつきが大きく、観賞用としての優良な個体を選抜していく必要があると考えられた（図2）。花色に関しては、クマノザクラは白、薄桜、淡紅をベースに、縁に淡紅や紅が混ざる2色タイプと混ざらない単色タイプに分かれることがわかった。

(4)サクラ類の連作障害

サクラ植栽地土壌についてレタスの根の伸長差を見たところ、比較的弱っている‘染井吉野’下の土壌においては樹冠外周下において根長阻害率が減少する傾向が見られた。また、土壌に活性炭を混ぜ土壌アッセイ法を行ったところ、1区を除いた全ての試験区において根長阻害率が低下した（図3）。

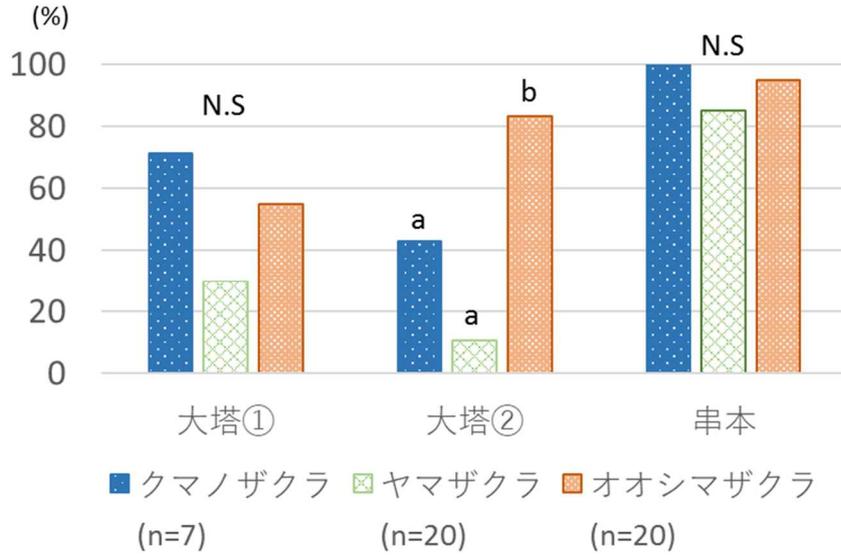


図1 台木樹種による接木活着率の違い

※2020年9月中旬接ぎ木。
 ※abはχ²乗検定による有意差があることを示す(P<0.05)。
 ※n.s.はχ²乗検定による有意な差がみられない事を示す(P≧0.05)。

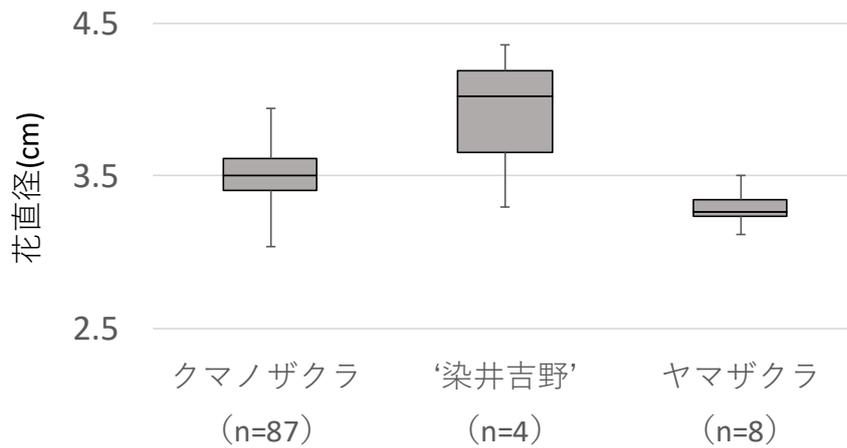


図2 花卉サイズの調査

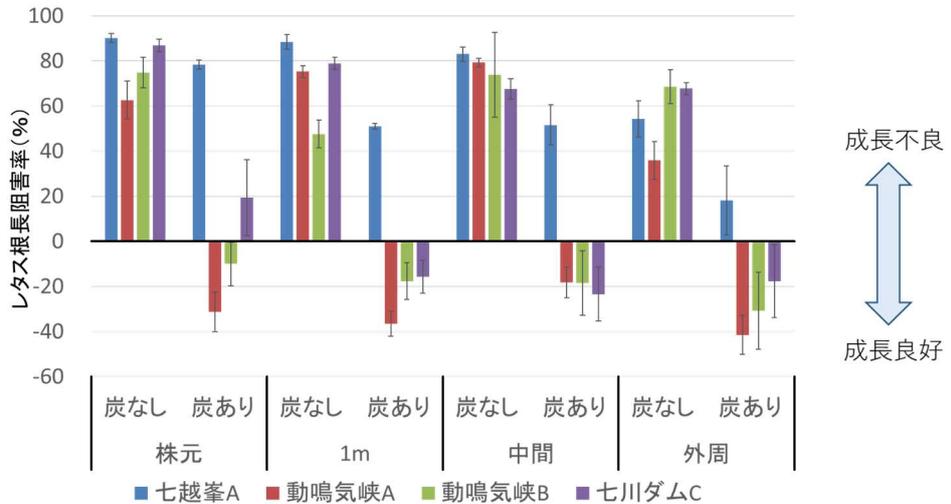


図3 活性炭施用時の根長阻害率